**特別講演要旨**

**「アイリス・マードックの語り口」**

**野中　涼**

　１．マードックの小説は、読者の心をさっとつかんで引き入れ、否応なしに先へ先へと話の筋を追わせます。語り口のうまさに感心しないでいられません。この絶大な面白さに彼女の現実認識のすべてが含まれているのでしょう。ただ、私などはかつて、どの作品も読みおわると、何だかそんなに面白がって夢中に読まなくてもよかったような気になったものです。わがままな読者で、1971年にマードック論の小冊子を出版すると、ぴたりと読むのを止め、それ以後の作品は最近まで一つも読まないできました。

　２．なにしろ彼女の人物たちは、大体に、みんな個性豊かなエクセントリックです。常識をやすやすと越えることで、強烈な魅力を発散しています。　『鐘』のドーラは、汽車の中で蝶を見つけて、衝動的にそれを両手にすくいとる。急いで駅でおりてホームに立ち、列車が動きだすや、あっ、スーツケースを忘れた、と気づく。出迎えた夫が、なぜ祈るような恰好をしているのか、と聞いて、初めて両手の手首をつけたまま花びらのように開くと、色あざやかな蝶があらわれ、頭上をひらひらと旋回してから線路のむこうへ飛んでいく。「いろいろ君は突拍子もないことをするね。」と夫が言う。単純穏和なエクセントリックが、どんなに無邪気に自分勝手であるか、どんなに楽しい困り者であり、愛すべき秩序破壊者、因習解放者にもなりうるか、それを鮮明に読者に印象づける話法として、これほど巧妙な場面描写はめったにない、と思わずにはいられません。

　３．それにマードックの文体には、ふらふらと舞い飛ぶ蝶のように、瞬間瞬間絶えず反転する習性がありますね。『黒衣の王子』のブラッドリーは、ロンドンから出よう、外国へ行こう、と決心して、荷造りをすませ、電話でタクシーを呼ぼうとすると、出発を遅らせたい、座って考えておきたい、と思いはじめる。長い手紙を書けば、書き終わったとたんに、わざわざ郵送するほどの文面でもなさそうな気になる。さて、と立ちあがる瞬間に、ドアのベルが鳴って、結婚生活の破綻に悩む妹がころがり込んできて、こうして彼はついに旅行には出られなくなる。マードックはドストエフスキーに親近感を抱いていましたが、それはそれは彼の語り口にもまったく同じ発想形式の逆説的反転がきわだっていたからでしょうそれをマードックは「ロシア人の習性」と呼んでいます。

　４．彼女の語り口で驚くのは、人物たちがしょっちゅう常識破りの、おそろしく大胆不敵な行動に出ることです。その厚かましさには度肝をぬかれますね。『海よ、海よ』のアロウビーは、少年時代の恋人が今は人妻だと知りながら、姿を見かけると追いかけるし、家まで訪ねるだけでなく、うまく連れだして自分の家に閉じこめさえする。本当は俺を愛しているんだと信じる自惚れの強い男の、ほとんど犯罪と言っていい誘拐監禁のストーカー行為にまでゆくところは、小説家としての想像力の強靱さ、幅広さ、勇猛果敢さに、脱帽せざるをえません。誘拐どころか、立ち聞き、住宅侵入、インセストを含む人間関係の急変、破滅や死へと追いやる言動など、多種多様な非常識が交錯雑居しています。

　５．つまり、マードックは、何のことはない、自我の蛸壺を出ようとして出られないエゴティストの一大群像を、ひたすら情熱的に描いてきた途方もない小説家です。彼等は一連の劇的な経験を通って、幻想の現実観に気づき他者の存在を容認できるような人物になるか、と言えば、結末でいくぶん変身するように見えることもありますが、1971年頃以降の作品では、どうやら大体に、成長や変身は怪しい場合が多い。ブラッドリーやヒラリー、アロウビー、ジョージ・キャフリーなど、あの徹底したエゴチィストぶりを思うと、ゾッと寒気に襲われます。私は以前は、そういう人物がたまらなく醜く、嫌に思われたものですが、今読むと、彼等のあまりに人間的な姿、絶望的な深い孤独の姿に、涙を誘われるような哀れさを感じます。